目次

1面　『研修会「深川まち歩き」開催』
１２面　『江戸・深川ウォッチング』／『お知らせ』
3面　『シンポジウム「新宿の風景」を開催しました』
4面　『会員の声』／『東京景観写真』／その他

みんなでつくる美しい東京

第４号
発行
美しい東京をつくる都民の会
東京都生活文化局都市美担当気付
〒163-8001　東京都新宿区西新宿2-8-1
TEL.　03(5388)3091
FAX.03(5388)1327
編集　広報委員会

研修会「深川まち歩き」開催

美しい東京をつくる都民の会の平成15年度の第二回研修会（後援：東京都）が、２００４年2月14日に　「深川まち歩き」と題しまして開催されました。

当日は天気も良く、まずまずの散策日和となりました。講師の小木曽淑子氏（下町衆団）の先導のもと、深川の史跡を３０名程の参加者とともに氏の解説を聞きつつめぐりました。また、途中の清澄庭園では進士五十八氏（東京農業大学）からレクチャーを頂きました。

本研修会開催にあたっては、下町衆団の皆様には多大なご協力をいただきました。

小木曽氏の案内で深川江戸資料館をスタート。

『江戸・深川の景観ウォッチング』

寄稿

進士五十八氏　（当会会長、東京農業大学学長）

今回の深川探訪は少し寒かったが、なかなか印象深いものでした。

私にとっては、中学から結婚までを過ごした”ふるさと”でもあるので、実は探訪ではありません。懐かしい町を歩いた楽しいひと時でした。

江戸深川資料館と元の区役所通りは、わざわざ江戸の下町の気分を出そうと演出し過ぎていて、私にはこそばゆいものでしたが、都民の会の皆さんは”納得”し易かったのではないでしょうか。

常夜灯や深川めしのお店など、まったくの歴史の捏造（ねつぞう）ですが・・・。

この点は、日本中の歴史的景観資源由来の観光地に共通することです。”歴”は”記録”。”史”は”物語”。ヒストリーは創られたものと思えば、気にならないかも知れませんが、少しでも”真実（オーセンティシティ）”に近づこうという努力も、忘れてはならないでしょう。

広々とした清澄庭園。

清澄庭園も、最近は都の公園協会が力を入れてていねいなメンテナンスがなされています。戦災直後は園内にバラックが建てられ、庭石で臨時の竈（かまど）が築かれ庭木を薪にして、生命をつないだとか、想像もつきません。ただ、眼前にひろがる美しい庭園風景の向うにそうした過去のあったことを想像し、他方で現在公園になっている隣地の元清澄庭園の西半分も昔に復して、明治初期の名園に復元できないか創造的方向をみつめることも大切だと思います。

紀伊国屋文左衛門の墓石と記念碑を対比的に眺めると、人間の評価や取り扱いは、生前よりも死後の評価にウェイトがあると考えさせられます。霊厳寺や浄心寺などで松平定信のお墓などに手を合わせつつ、私は子どもながら、カクレンボの絶好の場所として、こうし

清澄庭園の説明をする筆者。

（２面につづく）

（１面よりつづき）

霊厳寺・松平定信の墓標前にて。

た墓地に入りびたり、何か不思議な雰囲気を体感していたような気がしていました。

それが、江戸の芝居にもでてきた閻魔堂（えんまどう）のIT化したおみくじや屋上緑化された寺院建築をみて、果たして時代は進化しているのかどうか悩んでしまいます。

私が在学した元加賀小学校には行けませんでしたが、明治小学校の近くを通りました。私が若かりし頃お世話になった上原敬二先生の母校です。明治神宮の森づくりに携わった上原先生の「造園学への動機」は、帝大林学教室に学びつつも、死んだ材料である木材よりも生きている樹木を専門にしたかった、というものです。先生の『樹木大図説』全四巻には、樹種ひとつひとつについての植物学的記載は当然ながら、詩歌への登場場面をはじめ社寺名勝などその樹木にかかわる人文的記載がふんだんにあって、正に”樹藝（アーボリカルチャー）”そのものの博物誌になっています。こうした　”樹木への愛情”をさえ醸成したのが、”深川”という土地柄だったと思うのです。

ところが、その土地柄を無視した行為が次々と現出しています。旧木場の面影は筏を浮かべた掘割にあったのですが、それが殆ど埋められ、公園や広場、高速道路敷、緑地用地になってしまっています。

これでは”水の都”は全滅です。

私が子どもの頃八幡さまの御縁日のとき登った”深川富士”も撤去されて駐車場にされてしまいました。

江戸三大祭りのひとつ”深川八幡（富岡八幡宮）”は鎌倉期以来の古社だと聞いていましたし、私の長兄の神前結婚式も八幡さま、四年に一度の大祭には大小百基の神輿が、氏子の用意した水を掛けられながら渡御しますが、私も二度か三度、白足袋が破れるほどかついだ経験をしています。

その八幡宮の社殿の正面に立って愕然。背景に見える余計な高層オフィスビルが、あの堂々とした本堂を安っぽくしてしまっているではありませんか。

門前仲町で八幡さまのお隣、成田山深川不動。この本堂背後には、やたらピアの高い高速道路が横一文字。出来たときから困ったものだと思っていましたが、今回の再訪でびっくり。本堂の後側にお堂を高く新築して、正面からだけは高速道路を見せないよう工夫したらしいので

深川不動尊本堂の正面。

す。ただ、高さと前方広場の比率からみてもやや無理があって、余り落ちついてはきません。

これでは折角の辰巳芸者も有難く手を合わせることはできないでしょう。

この広大な東京で、せめて”深川”くらいは、江戸情緒を味わえる地域を目指した「都市再生」を期待したいものです。

（しんじ・いそや）

紹介場所の地図。

第４回総会・研修会『江戸の風景』・交流会のお知らせ

日時：平成１６年５月８日（土）総会・午後１時半～
　　研修会・午後２時半~　交流会・午後５時～

会場：台東区生涯学習センター　（台東区西浅草３－２５－１６）

基調講演：『江戸開府四百元年～江戸の風景に学ぶ～』
　　講師：竹内　誠氏（江戸東京博物館館長）

鼎談：『江戸の風景～下町あれこれ～』

パネリスト：進士五十八氏（当会会長、東京農業大学学長）
　　竹内　誠氏（江戸東京博物館館長）
　　荒井　修氏（浅草観光連盟事務局長）
　　工藤　裕司氏（（株）ハドソン名誉会長・庶民文化研究家）

参加申し込みはファックス03(5388)1327、東京都生活文化局都市美担当気付。4月15日(木）締め切り。

シンポジウム『新宿の風景』を開催しました！

美しい東京をつくる都民の会の平成１５年シンポジウムが、新宿区との共催で、2003年11月8日に、新宿区牛込箪笥地域センターにて開催されました。テーマは「新宿の風景」。戸沼幸市先生の基調講演、そして進士五十八会長が進行役を務めたパネルディスカッションが行われました。

喧騒の賑わいを見せる歌舞伎町、かつての農村風景の名残を留める落合、路地が息づく粋なまち神楽坂など、新宿区の多様な風景を題材に、風景づくりのこれからについて、語り合いました。

基調講演

『新宿の景観づくり - 誰がつくってきたのか -』

戸沼幸市氏（早稲田大学教授）

甲州街道の宿場であった内藤新宿あたりが新宿の原点ですが、明治の初めまでは江戸のはしっこでした。新宿が東京に飲み込まれるのは、昭和の初めに山手線が環状線になったとき。交通の発達は新宿の景観に大きな影響を与えました。人が集まることで、商店ができたのです。

また、都市の景観をつくってきたのは、実は大きな災害からのフォローアップでした。例えば関東大震災や戦災。歌舞伎町がその典型です。戦後すぐに、四角い広場をつくって劇場を建てましたが、あれは石川栄耀という都市計画プランナーと地元が一緒になってやった、民の都市計画です。そんな歌舞伎町にも今や50台の監視カメラが設置されています。しかし、それでも遊ぶというのは大変な度胸です。奥さんに見られちゃいますからね（笑）。

昭和30年代から、新宿は実質的に副都心から新都心となり、様変わりしていきました。かつては伊勢丹も三越も百尺（約30m）で高さがそろっていました。そういうルールがあったのですが、敷地さえ広ければ高さはいくらでもいいですよという容積制度が導入され、昭和46年には京王プラザホテルが建ち、高層時代となります。現在の都庁は200m。都は景観の観点から高さをおさえることに関して、発言権を失ってしまったのではないでしょうか。

”夜の景観づくり”も必要だ

福武洋之氏（早稲田大学建築学科４年）

近年観光産業の整備の必要性が言われています。都市観光の視点からは、夜の景観を考えることも大事です。例えば、歌舞伎町ですと、落ち着きより活気のある雰囲気をあかりで演出していくといった、まちの特徴を読みとき、それに合った望ましい景観を形づくっていく夜の光の都市計画も必要ではないでしょうか。

住民の意識を反映した景観づくりを

榊なほみ氏（美しい東京をつくる都民の会）

「新宿に住んでいる」というと、大変驚かれます。人の住むところではないという歌舞伎町のイメージがあるようです。しかし、例えば落合には美しい神田川があります。また、マンション建設などに「反対する」会は沢山ありますが、本会のような「つくる」会はあまりありません。景観には住民の意識が反映されていなければならない。原点に返って、活動を考えていきましょう。

当日の会場の様子。

パネルディスカッション

『景観づくりをどう進めていくのか』

どういう活動を通じて、人生の目標を達成するかは、勿論人それぞれですが、景観づくりはとっかかりのよい、人生の目標だと思っています。土地の歴史、雰囲気をよくわかっている都民自身がしっかり意思表示をしていけば、いやおうなしに景観はよくなっていくでしょう。

―進士五十八氏（東京農業大学学長）

神楽坂でタウン誌が目指す風景

長岡弘志氏（タウン誌『かぐらむら』編集）

『かぐらむら』の「まちの時間割」とは、「今」という時間を神楽坂で過ごしてくださいという意味です。神楽坂では、タワー型マンションが建っていますが、その足元には個性的な店が出来てきています。昔からの住民は、路地が居心地がいいと思っています。新しい住民の人たちも、タワーマンションから降りてきてくれるといいな、と思って頑張っています。

景観づくりにおける行政の役割

金子博氏（新宿区建築課長）

新宿区としての景観づくりの目標は、「歩く人に柔らかな都市景観をつくる」です。歩行者空間を確保し、道路を緑化することを考えています。事前協議制度や景観アドバイザー制度、また公募の区民の方々も含めて組織した実行委員会での景観まちづくり賞の選定などを行っています。しかし最終的に景観の良し悪しを判断するのは、地域の方です。行政はそれをお手伝いします。

会員の声

自転車と景観

私ども自転車走行を楽しむ者は、沿道の景色を比較しながら素敵なコースを追求している。例として都内の川の源から河口まで。上流では鴨がいても流末は汚れている。

しかし岸辺の草木や取合せよい建物などを見ると、住民や行政の方々の努力に敬意を表している。

まだ都内に魅力があったとホッとすることがある。

これからも素晴しい景色と素敵なコースを求めて、都内はもとよりできる範囲を仲間や単独で走るつもりである。

（東京サイクリング協会　小笠原淑夫）

隅田川今昔

都市と川は切っても切れぬつながりがあります。世界の都市の川巡りをしましたが、東京の川、隅田川の変遷を歌にしてみました。

・　ふんどしを締めて鉄橋飛び込みし　懐かしき友　今杖つきて
・　　黒塀の梯子を降りて　屋形船　提灯揺れる　夜桜見物
・垂れ流し戦後復興　好況に　鼻をつまんで渡る大川
・川沿いにこれ見よがしに立つ　高層　金色の雲　何の象徴
・緩傾斜堤防できて　整備され　何故かビニールテントが並ぶ

（世田谷区　大村　昭夫）

隅田川越しに高速道路と高層ビルを望む。

東京景観写真

会員、一般の方から寄せられた写真を掲載しています。

中央区日本橋　（撮影：団体会員高橋和由）

編集注：慶長８年（1603年）の建設以来、日本橋は何度か架け替えられ、明治44年（1911年）、現在残っている橋が架けられました。日本国道路元標が橋中央部にあり、東京までの距離はここを起点に測られています。東京オリンピックに向けた整備の一環で昭和37年（1962年）、高速道路の高架が上に建設されました。平成14年（2002年）に「東京都心における首都高速道路のあり方委員会」（国土交通省、東京都、首都高速道路公団）によって高速道路を日本橋上空から迂回させる提案がなされました。

会員を募集します

都民の会

「美しい東京をつくる都民の会」では広く会員を募集しています。都民の会は、環境や景観、まちづくりなどを一緒に考え、美しい東京づくりを進めていこうというもので、誰でも参加できます。

年会費は、学生千円、一般の方が三千円、法人・各種団体は一万円。お問い合わせは電話 03(5388)3091、東京都生活文化局都市美担当気付。